にエーテルの波動ではない。光は光としての存在である。かくて、機械論的唯物論は、一つの哲學的世界觀として、また現實なる存在の具體的把捉を包有すべきものとして、一般に自然科學の原理と成果とに對して、如何なる態度を取るべきかの反省を、强ひられるであらう。——更に、上述の力と物質との問題に聯關して、近世の自然研究は、傳來の實體（物質）保存の法則と並んで、新たにエネルギー（勢力）恆存の法則を獲得した。而して、機械論的唯物論は、世界の機械論的說明を基礎づけんがために、多樣に此の法則に依賴してゐる。併し乍ら、この法則の公理乃至假說としての意義と妥當性とは、（機械論的唯物論にとつてもまた）哲學的なる認識理論の問題とせられざるを得ない。且つ、力そのものに關する假說が如何に詳細を極めようとも、物質と力との關係が釋明せられざる限り、世界觀乃至形而上學にとつては、なほ幾多の問題が殘存すると言ふべきであらう。——更に、自然的宇宙の開闢に關する問題、從つて、有機體發生の問題もまた、時代の自然研究にとつてと等しく、機械論的唯物論にとつても、多樣なる關心事でなければならなかつた。自然發生の假說は、果して理論的徹底を期待し得るか。或は、必然的に超越的創造の奇蹟に導かれざるを得ないか。機械論的なる因果の系列は、何處まで辿られることが出來るか。かくて、この種の問題は、遂に實證的なる自然研究の領域を離れて、寧ろ綜合的なる世界觀の體系に組み入れられざるを得ない樣に見える。——更に、近世の機械論的唯物論にとつて、就中重大なる關心事となつたものは、進化論の展開であつた。そこでは、ノアの函船の傳說が示すが如き、生物界に於ける種の絕對性は破棄されて、これに代つて、漸次的なる變形の理說が樹てられた。そこでは、人體的計量的叙知的なる目的の概念は捨てられて、寧ろ機械論的なる淘汰と遺傳の概念が置かれた。このことは、一般に一切の目的觀を排拒して、剩すところなく機械論的なる世界形象を支持せんとする機械論的唯物論にとつては、實證的に錬へられたる好箇の武器でなければならなかつた。併し乍ら、顧みれば、そこには尙ほ多くの問題が、未解決なるまゝに殘されてゐる。例へば、生物界に於いて、形態の變化と生活條件の變化との間には、果して常に、直接的必然的一義的なる因果の聯關が

存するであらうか。そこには、例へば、突然なる形態の變移は存しないであらうか。これらの問題に關しては、自然科學そのものが決定を與へるであらう。更に、吾々にとつて一層興味ある問題として、例へば、目的の概念を擧げることが出來る。進化論は、實際に、絶對的に、一切の目的觀と相容れざるものであらうか。此の點に關して、或る一派の論者は、淘汰の概念の背後には、有機體に於ける部分の全體への適應乃至生得的なる前進的發展の傾向が、默認されてゐるが故に、この意味に於いて、進化論は有機體の素質に内在する或る種の内的形成原因を許容するものである、と論じてゐる。併し乍ら、淘汰の概念をか樣に解することは、アリストテレスの形式と質料の關係を思はせるものであつて、かかる所論は、全體として、古き目的論的世界觀への偏愛を告白するものであらう。吾々は、寧ろ、自然界に對する因果法則の普遍的適用を以つて、自然科學にゆるされたる權利である、と言ふべきである。併し乍ら、他面に於いて、例へばカントの說くが如き形式的乃至客觀的合目的性なるものは、自然科學的因果性と矛盾するものでなく、反つて、或る意味に於いてこれを基礎づけるものであるといふ見解は、自然科學そのものにとつてもまた、直ちに放棄せらるべきものではないであらう。進化論はこれを如何に見るか。機械論的唯物論は、進化論の理說を攝取するに當つて、この問題を如何に見てゐるか。かくて、ここでもまた、包括的なる世界觀理說としての機械論的唯物論にとつては、自ら反省すべき幾多の課題が提起されてゐるのである。

廣義に於ける心身の關係に關する問題は、機械論的唯物論の最も重要なる關心事に屬することを吾々は知つてゐる。かくて、近世晩期に於いて、腦髓や神經や感覺や、或は物質の新陳代謝や、はては類人猿と人類との比較や、これらの事柄に關する生理學的解剖學的研究、並に、一般心理現象に關する精神物理學的研究、等々の成果が、時代の機械論的唯物論に對して、雜多なる理論的材料を提供してゐたことは、容易に理解し得るであらう。併し乍ら、大體に於いて言ふならば、この種の研究領域に於いては、時代の機械論的唯物論が安んじて依據し得るが如き確實なる假說乃至定說は、なほ未だ、殆ど現れてはゐなかつたといふことを、わが唯物論史は

看過してはならないであらう。――先づ、人類の起原、人類の年齢、動物界乃至自然界に於ける人間の位置、人間史と自然史との關係、等々が（進化論並に遺傳說との聯關に於いて）樣々に論議された。人は、就中、古生物學、考古學、地質學、解剖學、等々の啓蒙的作業を賴んで、これらの問題に關する解明を試みた。併し乍ら、この方途を以つてしては、許多の人間學的疑問、例へば、所謂理性的存在としての人間は他者から如何に區別せられるか、人間的理性なるものは如何なる經路を以つて成立じたか、等々、機械論的唯物論が直接に關心を有すべき疑問は、未だ科學的の釋明を見出し得なかつた樣に見える。――併し乍ら、廣汎なる意味に於いて、心的過程の機械論的說明に資し得るが如き自然科學上の諸研究、例へば、腦髓や神經や感官等に關する生理學的解剖學的乃至心理學的諸研究は、わが機械論的唯物論の最重要なる關心の懸る所でなければならなかつた。ただ、この領域に於ける研究の進步は、一部分はスコラ主義的心理學の影響によつて、また一部分は對象それ自身の困難によつて、問題を愈々複雜にし、愈々難解なるものたらしめた樣に見える。

さて、由來、心が腦髓に於いて其の座を有つことが、長い間、基礎づけられざる經驗的信條となつてゐる。かくて、近世に於いてもまた、腦髓活動の局所說が、繰り返して、樣々なる變容を取つて、現れてゐる。それは、いはば、古き袋に新しき酒を盛らんとするものではないであらうか。さて、その最も粗雜なる形式は、則ち、所謂骨相學的見解である。そこでは、腦髓の構成は、特殊なる個々の精神活動に對應する特殊なる器官の系列から成ると考へる。而して、反對論者は、この種の假定の解剖學上の缺陷を指摘して、寧ろ、心的活動の基本的要素をば神經の反射運動に索め、ここから出發して、全意識生活の說明に及ばうとする。併し乍ら、これに對しては、また更に、反射運動は屢々意識を伴はざるが故に、この種のものの複合から全意識を說明することは、不可能であるといふ反對が成立する。卽ち、一つの全き機械は、その個々の齒車から說明せらるべきでないと考へられる。更に、別途の研究は、腦髓を以つて、心或は心的作用を產出する器官ではなくて、感覺と運動との複雜なる結合を齎す所の器官である、と說明する。かくて、人々は、意志或は感情等

の作用が、腦髓に於いて制約せらるる場所を指示せんとする。併し乍ら、ここでは、意識の本質、意識作用の成立は、なほ疑問として殘らなければならない。更に又、或る種の解剖學的生理學的研究が、神經に於ける聯合系統と投射系統とを區別し、或は運動神經と感覺神經とを分ち、進んで、神經機能が大腦皮質への上昇に於いて複合化し、末梢神經への下降に於いて單純化することを論じ、かくして、神經的刺戟と統一的意識との組織的聯關を說明すべく試みるときに、また他方に於いて、別箇の研究は、あらゆる神經過程に於ける興奮とそれの傳導の狀態は、(ただ强弱又は緩急等の差別を外にしては)本質的にはすべて同一であること、從つて、特殊なる感覺の神經過程とか、或は運動の神經過程とかは、存しないことを敎へる。更に、他面に於いては、意志とか知能とか、複合的なる機能をば、單純なる生理學的要素に還元することとの矛盾が、生理學的研究そのものの側に於いてさへも、樣々に指摘される。かくては遂に、一般に心は腦髓の機能であるといふ命題は、根底から、脅威せられざるを得ない。而して、それはまた直ちに、機械論的唯物論そのものにとつての脅威でなければならない。——心理學の領域に於いても、心理學自身を自然科學的生理學的基礎の上に置かんとする要求乃至傾向が、現れてゐた。古來のスコラ的觀念から解放されて、嚴密なる自然科學的經驗科學たらんとする傾向は、時代の心理學の大勢であつたと言ひ得るであらう。かくて、その極端なるものは、一種の數學的心理學とも稱す可く、いはば微分の方程式を以つて、心的現象の力學をさへも建設せんと試みる。併し乍ら、かかる作業の根底には、必ずや、何らかの形而上學が假定されてゐなければならなかつた。わが機械論的唯物論にとつて、最も歡迎せらるべく見えたものは、所謂身體的方法、卽ち、身體的徵候乃至身體的表現によつて一般心的現象の祕密を釋明せんとする試みであつた。それは、同時に、所謂聯想心理學と生理學的解剖學的研究との調和の試みを促進する。動物心理學の展開も、また類似の方向を目ざすであらう。併し乍ら、一般に、この種の所謂心のない心理學と雖も、一切の心的過程をば自然的因果聯關の中に悉く解消せしめて、以つて、心理學は遂に生理學の一部分であると斷定することに對しては、躊躇以上の反

對を表明してゐる。かくて、そこには、結局、或る種の平行論が、最後の亡命地として、殘されてゐるにすぎないであらう。――他面に於いて、感官の生理學は、經驗的世界が、單に主觀の構成する現象にすぎないことを敎へる。例へば、空氣若しくはエーテルの極めて多樣なる運動（震動）の中で、其の一小部分のみが視覺乃至聽覺に現れ、其の大部分は何ら感官的印象を與へることなしに、感覺とは無關係に動いて行く。餘りに多い空氣の震動は、音の感覺を成起せしめず、所謂紫外線は目に見えない。かくて、感官の攝受する世界は、結局、主觀的機制の產物に外ならない。尠くとも、これを惹起する所の機械論的原因と考へらるる物質なるものは、遂に感官を通しては知られざるものである。否、それは寧ろ吾々の觀念にすぎない。偖て、かくのごとき感官生理學の結論は、やがて寧ろ、唯心論的なる世界觀に導かるべき素因を包有すると、言ふべきではないか。機械論的唯物論が自己を主張し得んがためには、これに反對して、運動する所の物質が客觀的に存在すること、從つて、空間乃至時間の客觀性、等々が肯定されなければならない。近世の自然科學は、これらの問題を如何に處置したか。そこには、再び、何らかの形式に於いて、認識論的乃至形而上學的問題が喚起されないであらうか。かくて、機械論的唯物論は、ここでもまた、單なる自然科學的領域を超えて、一つの哲學的世界觀理說たることを自覺しなければならない。

偖て、近世に於ける、機械論的唯物論展開の背景をなしたる自然科學的研究の外貌をば、要約的に概觀したる吾々は、再轉して、これらとの聯關に立つ實踐論的思潮の上にも、またあわただしい一瞥を與へて置かう。由來、一般に、現實主義的功利主義的の見解は、行爲の原理を利害の觀念に基づけることによつて、遂に或る種の自己中心主義乃至利己主義へと導かれることは當然である。而して、機械論的唯物論の世界觀が、實踐論の領域に於いて、何らかの利己主義的信條を披瀝することは、容易に理解し得るであらう。この傾向は、近世に於ける物質的生活條件の發達に伴つて、增大したる物質的利害の觀念と結合する。併し乍ら、（古代に比して）利害、快樂、幸福、等々の原理的意義と素材的視野とは、著しく擴大せられたるをもつて、

近世機械論的唯物論の關心は、古代に於けるが如き直接的享樂ではなくて、むしろ將來のより大なる快樂のために、要求滿足の手段を蓄積することに向けられるであらう。古代の唯物論が、幸福（快樂）の相對觀を把持して、幸福と要求とを分離したのに對して、近世の唯物論は、より大なる要求（需要）が、やがてより大なる幸福への道であることを教へるであらう。而して、かくの如き實踐的思潮傾向は、經濟の領域に於ける資本蓄積の過程と、相互的聯關の中に立つと言ふことが出來る。併し乍ら、他面に於いては、機械論的唯物論の世界觀は、所詮、個體の存在をば全體の機構中に組み入れるものなるが故に、道德の理論に於いても、或る種の全體主義乃至世界主義を構成するであらう。かくて、その所謂利己主義乃至功利主義は、また原理的に、個別的利害の調和せられたる全體的功利主義、或は人間世界の全體的調和的利己主義へと導かれるであらう。ここには、共同的作業の原理はもとより、また同情乃至愛の原理さへも、形成せらるべき根據が存してゐる。かくて、一方に於いて、機械論的唯物論の道德は、財產の不平等と無產階級の成立とを結果すべき素因を含有すると言ふべく、また他方に於いては、所謂私有財產主義と共產主義と、兩つの理念は、相共に、此の道德說の地盤から生育することが可能であると言はれなければならない。——古代以來、唯物論は、常に、神と宗教と教會の權威と束縛とを、打破すべく努力して來た。近世の機械論的唯物論もまた、（時代の悟性の一般的啓蒙と協力して）傳統的成立宗教の信條を排拒し、人倫と文化とを、自由なる科學的基礎の上に於いて培育せんことを欲する。もとより、一切の目的觀を否定し、機械論的構造の普遍性を確信する此の世界觀が、無神論を支持すべきことは、理論的に必然的である。ただ、併し乍ら、成立宗教ではなくて、一般に內的經驗の事實としての宗教性そのものを、實踐の世界に於いて、如何に處理するかに就いては、時代の唯物論者の間にも、なほ種々なる見解が存してゐた樣に見える。——更に、進んで、近世の機械論的唯物論の藝術觀や、社會觀や、國家觀や、等々を考察することも、またわが唯物論史にとつて興味ある事柄でなければならない。併し乍ら、吾々は、主として紙數の缺乏の故に、その一切を割愛する。既に、この世界觀理說

の基調を理解したる讀者諸君は、それらの問題に關しても、甚だ多くの重要なる事柄を想見することが出來るであらう。

顧みれば、機械論的唯物論は、古代より近世に至るまで、哲學とともに生れて、哲學とともに生きて來た。この執拗なる生命力を有する思想的フェニックスは、長い興亡の歴史を通じて、常に、時代の自然認識に對する直接なる契合に於いて、その體系を組織し、(他の如何なる體系にもまして)恆に、經驗的實證的現實との緊密なる聯關を確保すべく努めて來た。ここに、一般に、その强味と、同時に、弱味とが存するであらう。而して、機械論的唯物論の歴史觀に從へば、思想の展開は、まづ目的論的原理が支配した段階から、次いで、それが自然主義と相闘つた段階を經て、最後に、目的論的原理が全く敗れて、機械論的唯物論が勝利を告げる段階へと、進んで行くと言はれてゐる。然らば、この近世的機械論的唯物論は、遂に、哲學的思惟の最後の到達點であらうか。——否。吾々の既に知つてゐる樣に、近世の末期以來、現代に及んで、そこには新たに力强き轉向が現れてゐる。所謂辨證法的唯物論の進軍行進曲が、高らかに響き亙つてゐる。いまや、吾々の唯物論史は、新たなるページを以つて、始められなければならない。

唯物論史

昭和二十四年十一月十五日發行

著作者　矢森

刊行者　田崎眞美

印刷者　東京都新宿區山吹町一九八番地　大和印刷株式會社　平盛

販元　東京都世田谷區代田一ノ六五二　株式會社　齋藤書店

振替貯金口座　東京A三一一九〇〇二番（鈴木銀行所）

定價　百四拾圓

終